

安岡章太郎

下
の
時
代
の
想

岡章太郎

現代思想

思想

講談社

セメント時代の思想

昭和四十七年九月十六日 第一刷発行

著者 安岡章太郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二 郵便番号・一一二

電話・東京(九四五)一一一一(大代表)／振替・東京三九三〇

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 六四〇円



落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© Shōtarō Yasuoka 1972 Printed in Japan

セメント時代の思想
目次

I セメント時代の思想

複雑怪奇

私の中の日本人

殉死と脚絆とり競争

リメンバー・パールハーバー

II 孫悟空の孤独

奪われたものの豊富な体験

井伏鱒二

なつかしき小径

志賀先生の遺言

川端さんの笑顔

151 146 141 107 88 71 63 56 49 30 11

まるくて暗い津軽の顔

散歩者の孤独

「抱擁家族」の頃

古兵の尊厳

うぶ湯の中から開口一番

Ⅲ

現実の“外国都市”ソウル

西部に行く

私の西部劇紀行

蠟人形博物館

テンガロン帽子の孤独

闘牛“残酷物語”

アフリカ旅立ち前夜

IV

私の好きな言葉

ゴリラと私

金史良について

強い言葉

犬が話すはなし

メーデー

私の新体制

つかれこそわがよろこび

あの頃の軽井沢

音楽の愉しみ

テレビのイタリヤ・オペラ

V

「第九」赤毛布の雑感

犬とモーツァルト

魂の鍛冶屋リヒテル

天国行きの切符を

一縷の解放感

柳周鉉著「朝鮮総督府」

河盛好藏著「エスプリとユーモア」

坂上弘著「早春の記憶」

清岡卓行著「フルートとオーボエ」

「週刊世界動物百科」

装幀 田村義也

セメント時代の思想
安岡章太郎

セメント時代の思想

つかぬことをいうが、目下私は頭の斜上から何かでおさえつけられたような圧迫感をおぼえている。この頭痛は、昨年ミサに出掛けたカトリック教会のモダンな建物のせいである。——カトリック信者でもない私が、そんなところへ出掛けたということも頭痛の原因かと考えられるが、これまで外国で日曜日のたびにあっちこちの教会へ引っ張って行かれたときには、こんな頭痛を起したことはないのだから、やはり原因はミサのためというより、この超モダンなカトリック・カテドラルの抽象的な建物のせいだと思えない。

ミサは二時間あまりもつづいたが、その間私は主としてカテドラルの天井を見上げていた。何と違って他にすることもなかったからでもあるが、西洋人の神父が日本語でお祈りの文句をうたい上げるように述べるのを聞いていると、私はなぜか眼を上げて天井の方ばかり見詰めずにはいられなかった。屋根の形のままに鋭角度に傾斜したその天井はコンクリートの打ちっばなしで、

見ているうちに私の頭に重苦しいセメントのかたまりが、いまにもゴツンとぶつかってくるように思われてきたのだ。——これではまるでベトンのトーチカ陣地の中に幽閉されているみたいではないか？

私はべつに大仰なことを言うつもりはない。たしかにこの教会の内部は近代的な要塞に似ており、おそらくマジノ線とかジグフリード線とかいった第二次大戦初期の塹壕の中には、このようなカトリック教の礼拝堂が実際に設けられてあったのかと思われるくらいだ。それに古今東西を問わず、寺院や僧院はしばしば城砦の役割を果してきたことだし、モダンなカテドラルが近代戦の要塞に似ていることは、むしろ当然かもしれない。

しかしマジノ線というのは結局、ナチの電撃戦にあってはほとんど役に立たなかった。要するに、それはフランス国民に対して「われらはかく守られている」という慰撫もしくは宣伝的な道具につかわれただけであり、敵に対しての実際上の効果はなかった。これは何もマジノ線には限らない。第二次大戦では戦艦もまた同様の運命をたどった。大和、武蔵、プリンス・オヴ・ウェールズ、ドイツチュランド、等々、当時の最新鋭戦艦はまったく実力を発揮するいとまもなく「時代」の波に追い抜かれて、なすところなく海底のもくずと消え去った。……無論だからといって、こんなことからベトンやコンクリート時代の終焉を予想するのは、早計に過ぎるのである

う。マジノ線が実戦上無力であったからといって、コンクリートの建物がもはや装飾的な意味しか持たなくなつたなどということはありつこない。ただ、私たちは鉄筋コンクリートの建造物を前にして、いつの間にか或る不吉な印象を無意識のうちにも抱くようになっていたのではないか——？

こんなことは第二次大戦前までは、考えられもしないことだった。いや戦後も、ついこの間まで私たちにとつてコンクリートの建物は、堅牢なるが故に美的であり、その中に住むことは最も進化した文化生活をいとなむことだといふような意識があつた。つまりコンクリートは近代思想のゴングであるように思われた。

まだ盛り場のはずれの店屋などには、木造の家の表側だけを四角いセメントの看板で覆つたものが残っている。銀座通りでも、ビルの上から眺めると、そういう上わつらだけをセメント張りにした家々の瓦屋根が、るいいるいとつらなつて寒さむとしたものを想わせた。しかし、いまになつてみると、この手の安手の建物が懐しくさえおもわれる。少くともそれは、この巨大なベトン・トーチカ風のカテドラルのように、天井が斜上から頭を重苦しく圧迫するようなことはない……。それに安手といえ、このコンクリートづくりのカテドラルだつて何処か粗野な安っぽさがつきまといつている。それは無論、建築費用のことではない。セメントの地肌をむき出しにした壁や天井は、決して費用の節約やケチ臭さを感じさせるものではない。そうではなく、この安

つばさはセメントという材料の何か「近代」思潮に通じ合うところから生じてくるように思われる。

技術は、それをつくり上げるまでに大変な努力と時間と才能とを要するが、いったん出来上がってしまうと誰でもが容易にそれを用いることができるという。そういう技術思想と同じものがセメントという材料の中に、そのまま含まれていそうに思われる。実際セメントぐらい便利に出来ているものはないだろう。形をとって流しこみ、かたまりさえすれば、それでどんな恰好のものでも出来上る。そういう便利なものを誰がつくったのか？ 電気灯や蓄音機はエジソンが発明した、蒸気機関車はスチブソンが走らせた、そういうことは私たちは子供の頃から知っている。しかしセメントというものは何処のどんな人が発見して使いはじめたものか、私は知らないし、とくにかんがえてみたこともなかった。つまり、それくらいセメントというものは、子供の頃から金魚の池を掘って固めたり箱庭をつくったりして誰でもが扱いなれており、われわれ日常生活の中に溶けこんでいて、ことさら誰の発明にかかるものかなど憶い浮べる余地もない程、われわれに密着していたというわけだ。

しかし、どんな恰好にでもなるセメントは、それ自体の性格を素材として生かしながら何かをつくろうとなると、これは怖ろしく扱いにくいものに違いない――。